

RIBEN JINXIANDAI WENXUESHI



日本近现代文学史

主 编 任 力
副 主 编 王 晚 明
王 佳 音 于 伟



东北林业大学出版社

日本近现代文学史

主 编 任 力

副主编 王晚明 于 伟

王佳音

东北林业大学出版社

图书在版编目 (CIP) 数据

日本近现代文学史/任力主编. —哈尔滨: 东北林业大学出版社, 2008. 7
ISBN 978-7-81131-152-5

I. 日… II. 任… III. ①文学史—日本—近代②文学史—日本—现代
IV. I313.09

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2008) 第 109058 号

责任编辑: 任 俐

封面设计: 彭 宇



NEFUP

日本近现代文学史

Riben Jinxindai Wenxueshi

主 编 任 力

副主编 王晚明 于 伟 王佳音

东北林业大学出版社出版发行

(哈尔滨市和兴路 26 号)

东北林业大学印刷厂印装

开本 850 × 1168 1/32 印张 8.75 字数 221 千字

2008 年 9 月第 1 版 2008 年 9 月第 1 次印刷

印数 1—1 000 册

ISBN 978-7-81131-152-5

I · 12 定价: 16.00 元

前 言

在世界文学史上，日本文学的产生虽然晚于历史悠久的中国文学，但是，在漫长的发展过程中，日本民族不断探索，积极吸收中国和世界其他国家文学的营养，使日本文学取得了令人瞩目的进步。日本近现代文学作为世界文学整体的一个组成部分，经过同西方的各种文艺思潮、流派等异质文学的碰撞与融合，在东西方文学的交汇点上创造了自己的辉煌，丰富了世界文学宝库，因而，系统地归纳和整理日本文学的发展历史具有独特的意义。

日本于 1868 年的明治维新迎来了近代的曙光，形成了近代社会。日本文学就是在日本近代社会的时代背景下，达到了文学从传统走向近代的基本标准——近代自我的确立；文学观念的更新；创作文体的改革。虽然日本近代自我是在封建专制主义体制的框架中“跛行”发展的，造成了近代文学产生的滞后，但是，日本文学仍然排除了前进道路上的阻碍，步履蹒跚地迈入了近代。

学习日本近现代文学史，旨在使读者了解日本近现代文学的产生和发展历程，以及日本近现代文学与日本不同历史阶段社会状况的联系，掌握日本文学史方面的基本理论、基础知识与概念，培养阅读理解、鉴赏评论日本文学作品的能力。

在编写本书的过程中，我们力图运用科学的观点和方法，结合日本近现代社会的时代背景和各个历史发展时期的社会问题，概括说明该阶段社会与文学的关系，以及在其影响下，日本近现代文学的各种样式、风格、流派的产生、形成和发展规律。介绍分析明治维新以来日本文学史上主要文学思潮和流派的小说、评论、诗歌、短歌、俳句、戏剧、文学期刊，评述代表作家和作品

的成就、地位与作用。

日本近现代文学史的时代划分是一个极为复杂的问题，从日本近现代文学发展的各个阶段来看，很难找到一种与之完全吻合的划分方式。本书参考了国内外大量的专著、教材，对各种理论、学说采取了客观、谨慎的态度，不拘一家、博采众长，将明治维新至大正 10 年左右划分为近代，其后为现代。

本书史料翔实，具有丰富的文学史知识。为了使读者更加形象地了解作家的创作风格，书中摘取了部分经典作品的原文节选，并插有著名作家、作品照片近 200 幅。书后附有主要文艺思潮、杂志、评论、部分名著的开头文、按汉语拼音为序的作家姓名、作品名读音及年代，以供读者欣赏和查阅。本书作为教材或参考书适用于日语专业的学生及爱好日本文学的广大读者。

本书由东北林业大学外国语学院日语系几位教师合作编写而成。任力负责全书的设计，指导解决编写中的疑难问题、统稿和最后定稿，并执笔概说；王晚明执笔近代文学小说与评论，负责全书的排版；于伟执笔近现代诗歌、短歌、俳句、戏剧及附录；王佳音执笔现代文学小说与评论。另外，承蒙东北林业大学日籍教师福田祥子女士费心审校，在此表示诚挚的谢意。

这是一部概述日本近现代文学发展规律的知识性著作，涉及问题颇多，囿于我们学识学力有限，在论点和材料的取舍、组织、简述、评价等方面定有不少遗漏、阙疑和不足之处，诚恳地希望读者给予批评指正。

编者

2008 年 6 月 18 日

目 次

概説	1
日本の近現代社会	1
近現代文学の特色	2
近現代文学の主なジャンル	4
近代の文学【明治初年～大正 10 年代】	9
啓蒙主義【明治元年～18 ごろ】	9
新旧交替の時期	9
啓蒙運動と海外思想の紹介	10
翻訳文学の流行	12
政治的啓蒙と政治小説	13
文学改良運動	14
近代文学の成立【明治 20 年代】	17
写実主義	17
擬古典主義と硯友社の文学	20
浪漫主義の文学	25
自然主義の文学【明治 30 年代】	35
前期自然主義の小説	36
自然主義文学の確立	39
反自然主義の文学【明治末ごろ～大正 10 年代】	52
情緒の重視と耽美派の文学	62
自我の拡充と「白樺」派	69
新現実主義の文学	78
近代詩の成立【明治 15～30 年】	91
新体詩の誕生と「新体詩抄」	91

訳詩集「於母影」の文学的香気	93
近代詩の展開【明治 30 年代】	95
浪漫詩の全盛	96
象徴詩の登場	98
口語自由詩の試作	101
近代詩の成熟【明治末～大正】	102
象徴詩の発展	102
近代詩の黄金時代	105
その他の個性的な詩人と訳詩集	108
近代の短歌	112
明治初期の歌壇	113
短歌の革新	113
明星派の短歌	115
根岸短歌会	117
自然主義の歌人	118
大正の歌壇	119
近代の俳句	122
「ホトトギス」の俳人	122
俳句革新運動	123
新傾向派と自由律	124
大正の俳壇	126
近代の演劇	127
演劇の改良運動	127
新派劇の動向	128
新劇運動と文芸協会	128
翻訳劇から創作劇へ	129
大正期の戯曲	129
現代の文学【大正 10 年代～現在】	131
プロレタリア文学【大正 10 ごろ～昭和 10 ごろ】	131

「文芸戦線」派と「戦旗」派	131
芸術派の文学活動【大正 13 ごろ～昭和 10 ごろ】	135
新感覚派	135
新興芸術派	139
新心理主義文学	142
文化統制下の文学【昭和 10 ごろ～20 ごろ】	145
転向文学	145
既成作家の活躍	147
新人作家の登場	147
「文学界」と「日本浪漫派」	149
不安の文学と行動主義	152
戦争文学と国策文学	154
芸術的抵抗派	155
戦後の文学【昭和 20 ごろ～現在まで】	157
戦後の解放と既成作家の動向	157
民主主義文学の出発と展開	160
無頼派	163
風俗小説	166
「近代文学」と第一次戦後派	167
第二次戦後派	171
第三の新人	174
新しい批評家の群れ	178
文学の大衆化現象	179
個性派（第四の戦後派）	182
女流作家の活躍	185
内向の世代	187
戦後生まれの作家	191
昭和から平成へ	195
現代詩の動向【昭和 2～20 年】	198

現代詩の出發	198
モダニズムの詩運動	199
「四季」の創刊	200
「歷程」の詩人	202
戦後の詩【昭和 21 年～ 】	203
戦後詩の出發	203
昭和 40 年代以降	204
現代の短歌	204
昭和の歌壇	204
戦後の短歌	206
現代の俳句	208
昭和の俳壇	208
戦後の俳句	209
現代の演劇	211
昭和期の新劇	211
戦後の演劇	212
付録	214
近代文学のまとめ	214
現代文学のまとめ	217
近現代主要雑誌一覧	219
近現代主要評論一覧	222
近現代文学著名作品冒頭文	224
作家姓名・年代	229
作品名・年代	246
参考文献	272

概 説

日本の近現代社会

1868年の明治維新は、日本が長い間の封建体制を捨て、近代国家へ飛躍しようとする第一歩であった。つまり、日本は封建性が崩れた明治維新以後はじめて近代を迎えた。明治2年(1869)の東京奠都、また函館五稜廓での榎本武揚らの降伏は、明治新政府の順調なすべり出しを決定づけた。新政府の各方面にわたる一連の改革は、途中いくらかの抵抗や反発もあったが、「諸事一新」として、国民の各層に浸透していった。そして、政治、経済、文化のあらゆる方面で先進的な欧米諸国に学び、急速に国際社会に進出しようというのが当時の識者の念願であった。

近代とは、人間が人間の値打ちを知り、自分や他人の個性を大切にし、それを自由に発揮することに目覚めた個人主義、自由主義の時代である。政治の方面では中央集権的な法治国家の時代であり、経済の方面では資本主義の時代であり、社会の方面では市民社会が形成された時代である。

西欧の近代は内発的^①に成熟したが、日本の近代は外国の圧力や政府の力で外発的に無理をして進めたものであったため、各方面に矛盾や不均衡を起こした。西欧の近代を手本として「文

① 外発的な近代化と内発的な近代化 夏目漱石が明治44年(1911)の和歌山での講演「現代日本の開化」で詳しく述べ、外発的な近代化をしていったことが、日本の近代の特性であり弱点であることを認めている。外発的な近代化であったから、精神文明と物質文明、都市と農村といった面に不均衡や矛盾が大きく生じてきた。

明開化」「富国強兵」をモットーに物質的、機械的文明を急遽輸入したが、西欧の科学文明を生んだ近代精神——個人主義、自由主義精神の育成を怠ったため精神的に未熟で底が浅く表面的であった。特に明治 20 年代に入って日本は国家主義、皇室中心主義の方針をとり、明治 43 年（1910）には韓国を併合し、中国の領土にあからさまな野心を示す帝国主義への道を歩きはじめた。以後、太平洋戦争終結の日まで個人主義の思想は抑えられたままであり、精神的な発揚はついになく、戦後改めて考えねばならないこととなった。

敗戦までの昭和期は激動の時代であった。昭和初期、不況の影響もあって社会主義が急速に広まり、危機感をつのらせた国家との先鋭な対立がプロレタリア文学を生んだが、弾圧によって破滅した。

遅れて近代国家の仲間入りをしようとした日本は海外進出を企て欧米の利害と衝突し、中国の侵略をはじめ、太平洋戦争を引き起こして敗戦した。この時期の青壮年の男性は、直接戦争にかかわらざるをえず、深く心に傷を負った人が多い。それらの人々が戦争文学を形成していった。

戦後、対外的にはソフトな外交に徹し、民主主義に基づいた平和国家として今日に至っている。日本政府は、アメリカをリーダーとする自由陣営に所属する決断をして経済発展を遂げた。それだけにアメリカ文学の影響が強くなった。豊かな生活と高等教育の普及で文学の読者は拡大、変質し、文学者の仕事はアウトサイダーの孤独な営みでなくなっている。

近現代文学の特色

リアリズムとリアリズムの問題 明治の初めごろに、たくさん書かれていた娯楽風の読み物を小説として西洋という芸術に

まで高めたいと考えたのが坪内逍遙で、そのための根拠がリアリズムの訳語である「写実」（坪内逍遙の語では「模写」）であった。正岡子規が俳句の近代化を考えたとき、根拠としたのが「写生」であり、それは短歌の場合も同じであった。逍遙と子規の提言は、後の文学に大きな影響をもち、リアリズムは近代文学に底流する理念となった。

夏目漱石の「こころ」では、主人公が下宿していた家の間取りをほぼ再現できる。ところが、横光利一の「機械」では、それはまったく不可能である。近代文学が細部の描写を積み重ね、作品のリアリティを保障したのに対し、現代に入るとそんなことにはいっさい頓着しないスタイルがあらわれたのである。しかし、プロレタリア文学は近代文学の手法を引き継いでおり、リアリズムが常に芸術の根底にあるが、伝統的なリアリズムでは近代文学を乗り越えきれないところから現代文学ではさまざまな方法や文体が編み出されていた。

人間の探求と人間存在の不確かさの自覚 優れた文学作品にはたいいてい人間の発見があり、近代文学を読んでもみると、しだいに人間の認識が深まっていくのがわかる。夏目漱石は人間のどうしようもない我執をつきとめ、いかにしたら我執をもつ人同士が連帯できるかに苦慮した。自然主義文学は主として本能の面から人間を追及している。

近代文学ではおおかた自我を確かなものとして信じていたが、昭和になると、芸術派の作家から個人の人格的持続に対して、疑問が提出される。戦後文学では、人間関係が解体していく過程を反映して、不安定になった人間のあり方が、「戦後派」をはじめ第三の新人や内向の世代によってとり上げられていた。

個人と社会 近代は個人が独立した時代で、人間は国家なり村なりの一員として生きるが、その全体によって個人が束縛されてはならないという思想が普及する。文学は時代の反映であ

るため、常に個人の発想から、根強く封建制と闘い、秩序を守ろうとする社会から個人をかばってきたのである。

文学の多様化 昭和に入ると大衆文学が一つのジャンルのように扱われ、純文学と平行していたが、戦後、その隔たりがあいまいになり、中間小説という言葉がつくられ、それに見合う作品が大量に書かれるようになった。推理小説がブームになり、空想科学小説は SF として独立する。文学の商品化が進み、多様化する社会のニーズに応え、企業小説、旅行小説、グルメ小説など多彩な作品が氾濫している。

また昭和 50 年代ごろからノンフィクションが盛んになり、書店にもコーナーができるようになった。さらに 60 年代にはカセット本が売れはじめ、文学の享受の仕方も多様化しはじめている。

近現代文学の主なジャンル

近代文学の最も主要なジャンルは小説である。つまり、散文芸術としての小説がこの時代の文学の中心となり、それは現在まで続いている。19 世紀の西洋は小説が盛んで、大作家を多数輩出した小説の世紀であったが、その影響が日本に及び、さらに「文学評論」や「近代詩」が新しいジャンルとして加わってきた。

小説 日本に最初にあらわれた近代小説は二葉亭四迷の「浮雲」と森鷗外の「舞姫」であった。二作に共通するのは社会の壁にはねのけられた人間の内面を掘り下げていった点である。しかし、その新しさは一般に理解されず、明治 20 年代の流行作家はいわゆる擬古典主義と呼ばれる硯友社の尾崎紅葉、その同時代の幸田露伴らであった。

明治 30 年代も紅葉の文壇支配は強く、ヨーロッパ文学の影響

を受けた作家たちはうだつが上がりずにいたが、紅葉の死後、彼らの時代が来る。島崎藤村が「破戒」を、田山花袋が「蒲団」を書き、自然主義文学と呼ばれるこの流れは、現実を描くというモットーから、フィクションを否定して、私小説を生み出していった。

この時期に夏目漱石が登場し、再び活躍をはじめた鷗外と並んで自然主義に批判的な流れを形成していく。また、明治末に「白樺」が創刊され、武者小路実篤・志賀直哉・有島武郎らが登場し、「スバル」には永井荷風・谷崎潤一郎らが集まった。大正に入ると「新思潮」から、芥川龍之介・菊池寛らが育ってくる。

大正後半期には労働運動が高まりを見せ、プロレタリア文学運動の発端となる「種蒔く人」が創刊された。昭和の小説はプロレタリア文学と芸術派（新感覚派）の対立で幕を開けた。プロレタリア文学は新しい世界観（マルクス主義）で、芸術派は新しいスタイルや文体で既成の文学に挑戦した。弾圧により左翼運動が終息すると転向文学があらわれ、挫折した人間が到達できる深さを示した。昭和の作家は世間を無視して超然と生きるといったことができにくくなり、戦争期にはリベラルな学者まで弾圧された。

戦後文学は戦争体験、思想統制など総じて暗い記憶を反芻することからはじまった。時代が展開するのはみずみずしい感性の大江健三郎や題名からして明るい「太陽の季節」の石原慎太郎が登場する昭和30年（1955）ごろである。この時期は第三の新人と呼ばれる一群の作家が世に出て息の長い活動を続け、現在なお活躍している人も多い。

戦後、人間の平等意識が普及するにつれて親や教師のものわかりがよくなり、若者に対する年長者の圧力が弱まり、近代文学の主要なテーマであった「家」の問題や社会と個人のテーマ

が風化してしまう。小島信夫の「抱擁家族」は家長どころかリーダー不在の家庭を描いて、昭和 35 年（1960）の安保闘争以後の日本に広がる退廃を暗示した。

内向の世代と呼ばれる作家たちは社会との対決を避けたというより、個人の内面のリアリティを重視する方向に向かうほかなかったといえる。また「性」以外に文学に共通するテーマがなくなり、文学運動で文学史が語れなくなった。新人賞などで突然出てくる作家たちが、名人の資質によって仕事をしているのが現状である。

評論 まず新時代の文学はどうあるべきかの指針を示したものとして坪内逍遙の「小説神髓」、正岡子規の「歌よみに与ふる書」がある。森鷗外主催の「しがらみ草紙」は評論中心の雑誌で、鷗外と逍遙の間で闘われた「没理想論争」などが掲載された。この時期北村透谷の華々しい活動があり、次の時代には自然主義文学を先導、擁護した島村抱月の評論が注目される。

明治末には石川啄木が「時代閉塞の現状」を、大正末には有島武郎が「宣言一つ」を書いて、それぞれ時代への敏感な反応を示している。

昭和 10 年（1935）に横光利一は「純粹小説論」で、純文学と大衆文学の統一を提言し、同じ年、小林秀雄は「私小説論」で、当時のさまざまな文学を「社会化された『私』」という考えで示し、新しい文学を提唱した。これらは文学の方向をリードする批評であり、戦後は文学史家を兼ねた中村光夫・平野謙や山本健吉などがあらわれ、評論は文学の重要なジャンルになった。あとには柄谷行人らが出て、評論は活気をおびている。

詩歌 新体詩のスタートは「新体詩抄」でイギリスの詩を七五調で訳したものが中心であった。日本人による芸術性の高い詩は島崎藤村の「若菜集」を待たなければならない。次に、薄田泣菫・蒲原有明の時代が来た。そのころ、後の詩に大きな影

響を与えた上田敏の訳詩集「海潮音」が出た。明治の末ごろから口語自由詩が試みられ、大正期に近代詩は実りの秋を迎える。北原白秋ら有力な詩人が多くあらわれ、なかでも萩原朔太郎は「月に吠える」で優れた象徴詩をつくり出した。

昭和の詩はアナキズム、ダダイズム、マルクス主義系の詩人らが、形式の破壊、情緒の否定など近代詩の変革を目指したことに始まる。一方、堀口大学の「月下の一群」は現代的な言語感覚の訳詩集で現代詩のあり方を示し、現代詩は近代詩の叙情と韻律から解放されていった。戦後の詩は人生的、思想的テーマの表現から始まり、回復された自由な風土から新しい感性が生まれ、やがて現実との対決といった固定観念を捨てた自在な詩が生み出されていく。

短歌 詩は明治の新興文学であったが、短歌、俳句のスタイルは確定しており、中身の近代化が必要であった。短歌の近代化に貢献したのは正岡子規と与謝野鉄幹であり、実作で近代短歌の金字塔を打ち立てたのは与謝野晶子の「みだれ髪」である。以後、鉄幹主催の「明星」と子規の流れをくみ、写生に基づく「アララギ」の対立が大勢となるが、「明星」は明治41年(1908)に終刊したため、大正期は有力な歌人を擁した「アララギ」の全盛期であった。

後に口語短歌運動や生活派、プロレタリア短歌などを一括した新興短歌運動によって「アララギ」主流の歌壇が揺さぶられ、新興勢力と「アララギ」に対立するロマン派が結集して「多磨」が創刊される。戦後は、俳句を含めて短詩型蔑視の風潮の中でも、歌人たちの地道な努力があり、個性をもつ新人が育っていた。

俳句 俳句の近代化に正岡子規の果たした役割は大きく、子規の没後「ホトトギス」の高浜虚子と同じく門下であった新聞「日本」の河東碧梧桐とに割れた。碧梧桐は子規の「写生」を

さらに深めようとしたが、後に新傾向運動に走ってあきられ、大正期に「ホトトギス」勢力を盛り返して俳壇に一大勢力を形成していった。

花鳥諷詠を唱える虚子が率いる「ホトトギス」とそれに反抗する新興俳句運動が昭和前期の図式である。戦後も「ホトトギス」は存続しているが、ほかに多くの俳誌ができたため、現在では数多い俳誌の一つといってよい。俳句ばかりでなく、流派よりも個人が目立つのが、近ごろの風潮になっている。

演劇 江戸時代から続く歌舞伎は写実性を加え、卑俗な部分が改良され、新しい脚本も書かれた。古典劇の歌舞伎に対して新派劇が起こり、主として当時の文学作品を脚色して上演した。明治末期から新劇運動がはじまり、島村抱月らによって西洋の劇が上演され、小山内薫らは翻訳劇と創作劇を、西洋流の演出で近代劇として定着させた。

戦前はプロレタリア演劇運動とその流れをくむ劇団に対抗する演劇運動という図式があり、それはほかの芸術分野と同じである。戯曲では久保栄・岸田国士が優れた作品を書いた。戦後は木下順二の「夕鶴」などの民話劇が息の長い上演で観客を集めた。以後の演劇界にも個性的な人物が多く出て、前衛的な試みが盛んである。